

日本には針供養など、長年愛用した物には心を寄せる文化があります。後始末の実践として、役目を終えた物に心向け、感謝の式を執り行なっている企業があります。栃木県倫理法人会の会員であるA氏は、廃棄物の収集・運搬事業、建物や浄化槽などの点検や清掃事業を行なう会社を営んでいます。事業を支えているのは約百台の特殊車両や社用車です。

車両を買い替える際には、納車式を行ない、安全祈願をします。それでも日々、多くの車両が稼働するため一定数の事故が起きてしまいます。

ある日、A氏は経営者モーニングセミナーに参加し、運送会社を営む講師から「車両買い替え時には廃車式を行ない、これまで働いてくれた車両への感謝の思いを形に表わしている」との話を聴きました。A氏は、これまでピカピカの新车にばかり意識が向いていたことに気が付き、自社で「廃車式」を執り行なうことにしたのです。

これまで働いてくれた車両に感謝の意を込め、洗車し、ワックスがけをして、引き取られる車両を従業員と共に見送ります。

また、ドライバーが使用後に毎回車内を清掃するようにしたこと、車両の状態に意識が向くようになったといいます。わずかな異音や異変に気が付き、その都度点検を行なうことで大掛かりな修理が減り、管理費も抑えられようになりました。中には二十五年ほど使用している車両もあります。一人ひとりが車両を大切に扱うようにな



## 感謝の心が 物の働きを引き出す

り、事故の件数は大幅に減少し、保険料率が五〇%から三〇%に引き下げられ、実践を始める前に比べ、経費は二百万円も安く抑えられるようになったのです。

この実践は車両だけに留まらず、工場内に設置されている機械も廃棄する際には心を込めて清掃を実施するなど広がりを見せています。

倫理研究所の第二代理事長である丸山竹秋は、後始末について以下のように述べています。

物質がなくては、およそ人は生きていけない。(中略)だが、それでは物質に感謝をしているかという点、かならずしもそうではない。

感謝はいろいろな形で現われる。つかうとき大切にするとか、愛情をかけるとか、さまざまであるが、そのものの後始末をよくしてやるというのも、感謝の心からなる表現にほかならない。

(『つねに活路あり』二六一～二六二頁)

私たちは多くの物に支えられて生活しています。どのような心で物を扱うかで、物の働きぶりも変化します。機械であれば愛情を持って定期的に手入れをすることで、本来の働きを十分に発揮してくれます。物を大切にすると、その物をもつ働きを最大限に活かすことにつながるのです。

仕事の区切りや一日の業務の終わりに、役目を終えた物を廃棄する際に、後始末を行ない、物を扱う私たちの心を磨いていきたいものです。